

日本近代文学大事典

第二卷

人名(こーな)

日本近代文学館



日本近代文学大事典

第二卷
人名(こゝな)

日本近代文学館・編

講談社

野沢。女中・女工となるが病弱のため長
続きしなかった。貧困のため病苦をおし
て働く生活を描いた『煉瓦女工』（公
論）昭一五・五）はただちに同名の短編
集（昭一五・五 第一公論社）におさめ
られ、戦争下の沈滞した文壇に新鮮な感
動をあたえた。戦後は『女子共産党員の
手記』（『新日本文学』昭二三・四、昭二
三・一〇 五月書房）を発表した。現在
民主主義文学同盟員。（伊豆利彦）

小池堅治 （昭和） 明治二一・四・九（昭
和四四・四・二四（1889-1969）独文学

者。福井市の吉田家に生れ、四高を經
て、三六年東京帝大独文科を卒業、この
間小池家に養子入籍する。同年七高教
授、四〇年二高へ転じ、のち山形高校教
授をも兼任したが、昭和七年退官。ひき
つづき二高講師などを嘱託され、二五年
停年退官したが、同年お茶の水女子大講
師となった。翻訳として『レッシング』『ミ
ナ・フォン・バルシ・ヘルム』（大
三・九 南江堂書店）出版以来数多くの
ものがあるが、とくに夏目漱石、二葉亭
四迷、森鷗外作品のドイツ語訳につと
め、鷗外作品の『舞姫』『うたかたの
記』『雁』をはじめとして歴史短編小説
のほとんどを翻訳紹介した。さらに徳富
蘇峰、土井晩翠、岡崎義恵らの論文のド
イツ語訳もこころみだ。秋草と号しドイ
ツ文学に関する随想も多いが、学問的研
究として『独逸表現主義文学の研究』
（大一一・一〇 古今書院）がある。

小池富美子 （昭和） 大正一〇・二・一三
（1921-）小説家。横浜市生れ。旧姓

こいずみし

小生夢坊 （昭和） 明治二八・二・一三（
1895-）随筆家。金沢生れ。本名第四
郎。日本画家広谷水石の門に学ぶ。雑誌
『ベースボール』に野球漫画を連載した
のち大正三年ごろ母と上京。雑誌『へち
まの花』に絵と随筆を寄せ、『二六新報』
の文芸欄を担当。大震災直後から曾我廸
屋五九郎の演劇活動に関係、尽力した。
戦後の著作に『天狗まんさん』（昭二
八・九 長谷川書房）『小生夢坊随筆集』
（昭四八・七 八光流全国師範会）があ
る。（網野義敏）

小泉三申 （昭和） 明治一七・五・五（
1882-1960）俳人。

昭和五・一・一（1880-1960）俳人。
東京本所生れ。本名清三郎。子規の『俳
諧大要』によって俳句に開眼し、明治三
六年『サラシ井』創刊主宰。伊藤松宇の
『にひはり』に加わり、のち『俳諧維
誌』（俳書堂）に拠る。昭和五年三月
『俳陣』創刊主宰。著書に『最新俳句歳
時記』『俳句と連句の作り方』『俳句用
語』などがある。

小泉三申 （昭和） 明治五・一・一（1880-1960）俳人。
秋拾河東聴く夜となりけり（柳生四郎）

昭和一二・七・二八（1872-1937）新聞
記者、政治家。本名策太郎。郷里は静岡
県伊豆の子浦で、父定次郎の長男に生れ
た。新聞界に志を抱いた彼は、地元の
『静岡日報』を経て、東京の『自由新
聞』の記者となり、高知からきた幸徳秋
水と寝食をともにし、生涯の親交を結ん
だ。明治三六年、経済新聞社長となり、
株式投機で巨利を博したが、社会主義者
になった友人秋水の財政的窮乏をつねに
助け、大逆事件の直後、郷里中村の正福
寺墓地に建てられた幸徳秋水の墓碑銘を
みずから執筆した。四五年以来、静岡県
から衆議院議員に選出されること七回、
政友会の重鎮、政界の惑星として知られ
ていたが、昭和三年、田中義一内閣のと
き、久原房之助の入閣に反対して失敗し
たために、政界を引退して、鎌倉の別邸
に隠棲した。名著『懐往時談』（昭一
〇・一一 中央公論社）のほか、四巻ま
でで中絶したが、『小泉三申全集』（昭一
四・一七 岩波書店）が残っている。

小泉信三 （昭和） 明治二一・五・四（
1886-1960）経済

学者、随筆家。東京府東京市芝区三田四
ノ二九に、父信吉、母千賀の第三子次男
として出生。ただし兄夭折のため、長男
として入籍。父は旧和歌山藩士、母も同
藩御殿医の女。父は江戸築地の福沢諭吉
の塾に学び、慶応義塾長となった。幼年
横浜に居住、父の死去により東京に帰
住。これ以後福沢諭吉の晩年に、身近く
暮らした。御田小学校の同級生に水上瀧
太郎（阿部章蔵）がいた。明治三五年一

月、慶応義塾普通部（旧制中学）の二年
に編入。中学時代から大学予科にかけて
庭球に熱中、小泉とテニス、さらに小泉
とスポーツとの関係はその人間形成にお
いて逸話がたい。『練習は不可能を可能
にする』という言がある。テニスに替わ
って学問が大きく小泉の心を占めるよう
になったのは、四〇年四月、大学部政治
科に進み、福田徳三の講義を聴くようにな
ってからだという。小泉自身いうごと
く、根本的な点において、マルクシスト
として出発した。在学中『三田にきりん
児小泉あり』という名声が流布してい
た。なお大学では二年上に高橋誠一郎が



小泉信三

いた。四三年三月卒業。ただちに大学部
教員となったが、この年、三田の文科の
改革が行われ、小泉は水上瀧太郎らと
ともに、永井荷風、小山内薫の講義を熱心
に聴講した。このころ久保田万太郎を知
った。

大正元年九月、欧州留学に出发、ケン
ブリッジ、ベルリン、ソルボンヌ等の諸
大学に学び、世界大戦下の生活を体験、
あしかけ五年におよぶ海外生活ののち、
五年三月帰朝した。四月、大学部教授と
なり、経済原論その他を担当。そのゼミ
ナールの学生の中に西脇順三郎、野坂参

三がいた。一三年一月から昭和八年一月まで図書館長を勤めたが、同時に、大正から昭和へかけて、山川均、河上肇、楠田民蔵らとの間に価値論の論争が行われ、マルクシズム批判者としての小泉の名を不動のものとした。

昭和八年一月、四六歳の若さをもって慶応義塾長となり、以後学校経営者として昭和の動乱期を一四年におよび精励した。その間、専門の経済学研究書のほかに、『師・友・書籍』（昭八・六 岩波書店）以下多くのエッセイを執筆公刊した。

太平洋戦争は小泉のもとから嗣子信吉を奪い（昭一七・一〇・二二）、南太平洋方面にて戦死、自身また戦火により、友人水上をして「抜ん出て背の高く風采のすぐれている」人として描かしたその容貌を失った。つづいて昭和二二年一月塾長退任、慶応義塾との関係が絶えた。しかしその清閑はかえって小泉をして文筆活動をさかんならしめ、ことに和本清三郎が雑誌「新文明」を創刊（昭二六・九）するやほとんど毎号これに執筆した。二四年二月、東京御教育常時参与となり、三三年一月、慶応義塾評議員会議長に推されふたたび慶応義塾の経営に重責を担うことになった。三四年一月文化勲章を受けた。

小泉の全業績は、『小泉信三全集』全二六巻、別巻一冊に収められたが、その達意明解にして理と情との平衡のとれた文章は、独自の美文というにふさわしく、かつて（昭二四）柳田国男と長谷川如是閑とが会したおり、小泉の文章こそ

新時代の美文というに足りるものであるという点で、意見の一致をみたと伝えられている。

『小泉信三全集』全二六巻、別巻一（昭四二ノ四七 文芸春秋）がある。

（海軍主計大尉小泉信吉）
回想集。昭和二一春、私家版（三〇〇部）。昭和四一・八 文芸春秋刊。嗣子信吉戦死後、『父小泉信三』の署名により



海軍主計大尉小泉信吉（箱）

り私家版として親戚知友に配られた追憶記で、嗣子文六をして小泉文学の最高傑作と評せしめたもの。生前公刊を許さなかったため「幻の名著」として回説、筆写されて伝えられていた。のち文芸春秋社より広く公刊された。

（参考文獻）『小泉信三先生追憶録』（昭四一・新文明社）小泉タエ、秋山加代『父小泉信三』（昭四三 毎日新聞社）『小泉信三全集別巻』（昭四五 文芸春秋）（池田弥三郎）

古泉千樫 明治一九・九・二六ノ昭和二・八・一一（1886ノ1927）歌人。千葉県安房郡吉尾村細野（現・鴨川市細野）の生れ。父弥市、母きくの長男、本名幾太郎。家業は中ぐらいの自作農。妻喜代子との間に葉子、条子、佐代子、玲子の四女（条子早世）。一〇歳父より四書の素読をうく。小学生時代は自

家の農仕事、牛のせわをす。一四歳「万朝報」の歌壇へ投書をはじめ。選者は海上胤平、小出繁。一五歳吉尾村高等小学校卒。母校の代用教員に採用された。この年の作に、「夕されば庭の木立に鳴きし蟬向うの丘にうつりてぞ鳴く」。一六

歳四月千葉教員講習所に入所、一〇月卒業、小学校準訓導の資格を得。一七歳二月安房郡田原村竹平校に奉職。「心の花」に作歌を投稿、選者は佐佐木信綱。新聞「日本」にも投稿。このころすでに「万葉代匠記」「万葉集古義」を説破す。一九歳「心の花」「比牟呂」「馬酔木」に投稿。「馬酔木」に投稿した「樹余漫吟」二〇首中一二首を伊藤左千夫に選ばれ激賞をうけ、これより左千夫を師とした。

後年の自選歌集『川のほとり』の巻頭歌「みんなみの嶺岡山の焼くる火のこよひも赤く見えにけるかも」はこの年の作とされている。二〇歳はじめて千樫の号を使う（以前は東村、幽哉、一翫、沾哉など、以後は淮南莊主人、樗老人、蒼岡老人など）。明治四〇年二二歳五月一二日上京、本所茅場町無一庵庵に師左千夫を訪ね四泊。長塚節、蔵真、石原純、斎藤茂吉、平福百穂らにはじめて会う。このときの作に、「この庭の槐わち葉のにひみどりにほへる蔭にわれ立ちにけり」。

また「心の花」の選者石博千亦を訪ね就職口を頼む。四一年二三歳小学校教員退職、五月三一日上京。左千夫のせわで本所緑町滝沢方の二階を借りた。上京の裏面には恋愛問題で郷里に居にくくなった事情もある。一〇月左千夫に従信濃に行き島本赤彦に会う。一〇月末石博千亦

のせわで帝国水難救済会に職を得、石博救難課長の部下となる。この一〇月に森鷗外宅の観潮楼歌会に左千夫に随い出席し、石川啄木、北原白秋らを識った。この年の一〇月には蔵真の手で下総から「アララギ」が創刊され、翌年九月にはアララギ発行所は東京の左千夫宅に移り、千樫は茂吉とともに編集を手伝った。土屋文明、中村憲吉ともその年に会った。千樫は「アララギ」に全力を注いだ。「かきろひの夕棚雲の心ながくなく待つべき君のいひしを」「さ夜ふかくなくやこほろぎ心ぐし人もひそかにひとり居るらし」の作がある。千樫は茂吉と最も親しかった。千樫が自然主義文学に深い理解をもっていることを茂吉も認め



古泉千樫

た。大正二年二八歳六月に本所区南二葉町三に転居し、アララギ発行所は千樫宅に移り、編集人も千樫名義になった。七月三〇日には師左千夫の急死にあい、「アララギ」を東京堂、上田屋、勉強堂、盛春堂などの書店に置いてもらいにまわった。同年七月にアララギ叢書第一編赤彦、憲吉合著歌集『馬鈴薯の花』、一〇月に茂吉の『赤光』が出、千樫の『屋上の土』も続いて刊行を予告されたが、在世中には出なかった。千樫はしだ

いに歌壇の諸氏とも交遊するようになった。この年の作品に「夜は深し燭を續くとて起きし子のほかに冷えし肌のかなしさ」「うつなく眠るおもわも見むものを相嘆きつつ一夜明けにけり」「朝なればさやらさやに君が帯結ぶひびきのかなしかりけり」「あらしのあと木の葉の青の揉まれたる匂ひかなしも空は晴れつつ」がある。三年にはアララギ発行所が茂吉宅に移り、やがて「アララギ」のために専念する島本赤彦の東京となり、編集所は赤彦宅に移った。千樫は作歌に研究にはりきり、茂吉、赤彦、憲吉らと万葉集短歌論講をはじめた。四年三〇歳の作に、「鶯の群かすかきりなき鶯のむれ騒然として寂しきものを」「雖然と鶯は群れつつおのがじしあなやるせなき姿なりけり」「物おぞく鶯は群れつつ細長き木のごとくに鶯の巢の見ゆ」「闇ふかく鶯とびわたりたまゆらに影は見えけり星の下びに」「かすかなる星の下びけりつぎに飛び行く鶯の見えつともとな」がある。後年千樫は「僕の歌は写生を基調としてある事は言ふ迄もない事だが、出来た歌を見ると具体的の写生その物よりも心持の方が勝っているやうだ。例へば鶯の歌を作らうとして鶯を見に行く事幾日続いたか知れない。然るに出来上つた歌は以上のやうな歌だ。然し斯ういふ形になつた歌も幾日かの深い写生から生れた物だ。そこに僕の強みと安心とがある」と語った。千樫の作風を解するのに逸すべからざる『集』だ。当時土岐哀果が『作者別万葉短歌全集』を出版、千樫は「アララギ」誌上三回にわたりその誤謬

をただちに指摘。それは千樫の『万葉集』にたいする深さを示すのであった。六年三二歳二月に青山穂田から青山南町に移った。「移るべき家をもとめてきさらぎの埃あみつつ妻とあゆめり」「いくたびか家は移れる崖下の長屋がうちに今日は移れる」の作がある。そこが終焉の地となつた。千樫は牛が好きであり牛の歌も多い。同年作に、「さ庭へにつなげ牛の寝たる音おほどかにひびく昼ふけ



川のほとり

が中心に、歌壇の主流は「アララギ」になつていた。そのころから千樫にたいする憶測が内外に噂されつつあった。一三年三九歳四月歌誌「日光」が創刊され、千樫は白秋、土岐善麿、前田夕暮、釈迢空、木下利玄、川田順らとともに主要同人となつた。茂吉は外遊中であつた。これが「アララギ」と疎縁となる結果となつた。八月二七日千樫は俄然咯血した。郷里の安房に帰り静養。「いきさのをに息ざし静めこの幾日ひた仰向きに寝ね居る吾れを」「ひたごころ静かになりていねて居りおろそかにせし命なりけり」「うつし世のはかなしごととにほれほれと遊びしことも過ぎにけらしも」「秋さびしものともしきひととの野裨の垂穂瓶にさしたり」「秋の空ふかみゆくらし瓶にさす草裨の穂のさびたる見れば」「山の上にひとり焚火してあたり居り手をかざしつつ吾が手を見るも」「ひとり親しく焚火して居り火のなかに松毬が見ゆ燃ゆる松かさ」の作がある。一四年五月改造社から歌集『川のほとり』を出版。病状は一進一退。一五年一月水難救済会退職。同年五月門下とともに青垣会を結成。歌誌「青垣」を創刊すべく計画を進めつつあったが、創刊を見ずに死去。満四〇歳一ヵ月。「青垣」は昭和二年一月「古泉千樫追悼号」として門人たちにより創刊され現在におよんでいる。大正一四年作に「日の光あたたかければ外に出て今日は歩めりしばらくのあひだ」「露の音たえまなくしてこの山のあかつき近くなりけらしも」「わが待ちし秋は来りぬ三日月の光しづけくかがやけり

けり」、大正一五年作に「幾日か日のてる外に吾れ出でず命にふりて冬ふけにけり」「ふるさと秋も寒くぞなりける門の蕎麦畑に雨のふりつつ」「ひやびやと山のいただきに草を踏むわれの素足をわが見たにけり」「けさの朝は五月一日河鹿鳴くすがしきこゑに目ざめけるかも」、昭和二年作に「ほがらかにをさなき吾兒が笑ふなべ笑はむとすれば咳いであんとす」「えんがはにわが立ち見れば三月の光あかるく木木ぞうごける」「麻布台とほき木立のあたりにほつばき光りて鶯の翔れる」「みなぎらふ光のなかに上ふみてわが歩みくればわが子らみな来つ」「幾足かわが歩みけむ持ちて来つる瓶の水を飲みけるかも」「この墓地に今咲く花のくさきを子らは折り来ぬわが休み居れば」「墓原に咲けるれんげう木瓜つばさしきみの花も見るべかりけり」。門人には松倉米吉、相坂一郎、三ヶ島霞子、安田稔郎、大熊長次郎、長沢美津、橋本徳寿その他。著書『川のほとり』のほか『屋上の土』(昭三・五 改造社)『随縁鈔』(昭五・三 改造社)『青牛集』(昭八・二 改造社)、編著『竹里歌話』(大一一・三 アルス)、『竹乃里歌全集』(斎藤茂吉と共編、大一一・三 アルス)、『長塚節選集』(大一一・七 アルス)。

橋本徳寿、安田稔郎共編『定本古泉千樫全集』(昭三七 白玉書房)がある。『川のほとり』歌集。大正一四・五、改造社刊。明治三十七年から大正一三年までの作品四三三首を自選して収録。千樫は大正一三年半ばごろより健康を損

ね、このころ歌稿を整理し、歌集出版のことを強く意圖するようになった。一四年はじめ、寝たり起きたりの状態のままこの仕事にかかり、三月末には全部選り終わった。千種はこの歌集の「巻末小記」で「わたくしはこの選集『川のほとり』を編むために二十余年間の自分の作歌を一通り見た。自分の歌は自分が常に思つて居たよりも、今度病床でこの選集の目安を作りながら思つてゐたよりも、實際見て見ると甚だ拙いものであることをつくづく思はせられた。わたくしはた歌集を近く出したいといふ心は前よりも一層切なるものがある」と述べている。

〔参考文献〕『古泉千種追悼号』(青垣 昭二・一) 大熊長次郎『晩鐘記』(昭六 白帝書房) 橋本徳寿『古泉千種とその歌』(昭一四三首堂) (橋本徳寿)

小泉長三 明治一・二・六ノ小説家。英城生れ。青年期に晩年の仮名垣魯文に師事し、万朝報記者を勤めた。四五歳で『赤熱の鞭』を『少年俱樂部』に発表、以後、時代小説作家として長短編合計五〇〇編以上を多作した。伊達騒動の原田甲斐と由比正雪の遺子お葛の關係を描く『鬼三味線』(富士 昭三・一)、『編纂本調子』(続鬼三味線)、『富士』(昭四・一)が代表作。

小泉三三 明治二七・四・四ノ昭和三一・一・二七 (1884-1936) 歌人。横浜生れ。本名謙造。大正六年東洋大学国文科卒。文学博士。立命館大

学、北京師範大学、関西学院大学などの教授を歴任。大正三年三月車前草、翌年水鏡同人となり、一二年『ボトナム』創刊。歌集に『夕潮』(大一一・八 水鏡社)、『くさぶし』(昭八・四 立命館出版部)、『山西前線』(昭一五・五)がある。抒情味の豊かな平明な歌風で、強烈な個性を示現するまでにはいたっていない。

作歌活動よりも、学究活動、とくに近代短歌研究に秀れた業績を残している。膨大な資料収集に基づいたその研究書として『根岸短歌会の位相』(昭九)『明治大正歌年表』(昭一〇)『近代短歌の性格』(昭一五)『明治大正短歌資料大成』三巻(昭一五・一七)『歌人千規と其周辺』(昭二二)『近代短歌史・明治篇』(昭三〇)などがある。

『白楊の直ぐ立つ枝はひそかなりひととき明き夕べの丘に』(『夕潮』)『つつましき常ある人の口籠りいへる言葉は我を死なしむ』(『くさぶし』)

〔明治大正短歌資料大成〕(昭和三〇) 研究書。昭和一五・六・一七・四、立命館出版部刊。全三巻。一巻『明治歌論資料集成』二巻『明治大正歌年表』三巻『明治大正短歌大年表』。第一巻には明治一五〜三五年にいたる歌論五二編を収め、第二巻には明治大正年間における歌書を網羅し、第三巻には明治、大正年間の歌書、雑誌新聞に発表された歌論、歌話を年代順に編んだもので項目四万余。

〔近代短歌史・明治篇〕(昭和三〇) 研究書。昭和三〇・六、白楊社刊。序論に日本文学史の一部門としての和歌史の位置

その他を論じ、総論にその学的立場と態度を明確に述べている。和歌革新以前の歌壇の様相を精査し、和歌革新に展開する道筋を明らかにしている点、近代短歌発生以後の潮流を、理想派、現実派に分け、現実派に浪漫派と自然主義派を包含させている点などに特質が見られる。

(木俣 修)

小泉 鉄 明治一九・一二・一〇(昭和二九・一二・二八) 小説家、翻訳家。福島県出身。一高卒業、東大哲学科を中退。第二次新思潮同人になるが、一高在学時よりの友人児島喜久雄との縁で武者小路実篤に接近し共鳴する。白樺同人に加わり、誌上、明治四四年五月に論文抄訳『マックス・クルーゲルに就て二つ』で誕生。以来、同誌終刊にいたるまで翻訳、感想、小説、戯曲、詩、美術紹介、評論を精力的に発表し、大正中期より編集を行う。他方、その衛星誌『太陽の都』や、『我等』『解放』などに執筆して、進歩的社會主義的な傾斜も見せる。ポール・ゴーガン(の翻訳『ノア・ノア』(大一一・一 洛陽堂)、戯曲『アダムとイヴ』(大七・五 洛陽堂)。長編自伝小説『自分達二人』(大四・四 洛陽堂)と『三つの勝利』(白樺 大三・一二・四・一〇)とは連作ということができる、この濃密な青春譜に愛と悲劇と希求とを打ちあける。昭和に入つて『蕃郷風物誌』(昭七・五 建設社)を刊行、晩年、不遇のうちに死去。

(町田 栄)

小泉八雲 明治二七・四・一八(昭和二九・一二・二八) Lafcadio Hearn 一八五

〇・六・二七・一九〇四・九・二六(嘉永三ノ明治三七) 随筆家、批評家。イギリス人。のち帰化。ギリシア、アイオニアのリュカディア島生れ。島の名にちなんで命名された。父チャールズはアイランド系の軍医、母はギリシア人ローザリカシマティ。生後一年半、父の西印度諸島赴任によりダブリンへ帰ったが、一八五六年、父母の離婚のため大叔母のもとに預けられた。一生を通ずる母への思慕と父への反感がつのることになった。一八六三年ダラムのローマ旧教の学校に入学、生来ひどい近視だったが在学中遊戯をして左眼を傷つけ失明した。一八六六年退学、一月父死去。フラン

ス、ルーアン近郊イヴトリーの旧教の学校へ入ったが中途退学。一八六九年二歳のときアメリカ、シンシナティ市に行き、窮乏にたえながら文筆の修業、七四年『シンシナティ・インクワイアラー』紙記者となり、市井の生活に取材した記事をかいた。同年六月、後援者を得て『絵入日曜新聞』創刊。一八七六年『シンシナティ・コマーシャル』紙に移り警察関係の探訪記事を書く。一八七七年一月ニューヨーク・ヘンズ(ヘンズ)紙へ通信文を送った。翌年六月『デイリー・アイテム』紙に入り社説、随筆、時事漫画のほか外国記事をかいた。一八八一年文学色の強い『タイムズ・デモクラット』紙の文学部長となり、モーパッサン、A. フランズ、ロティ、ドードー、ゾラ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、ハイネなどアメリカに親しみの薄いヨーロッパの作家の作品百八十余を翻訳発表し注目さ



小泉八雲

れた。アメリカのボヘミアンの中心の一つにおけるこの活動は日本時代の講義の背景を示している。東洋、日本への関心もこのころ抱きはじめた。この間翻訳集『クレオパトラの一夜他』(1882)『異文学遺聞』(Stray Leaves from Strange Literature) 1884) を刊行。八七・八九年西印度諸島とくにマルティニック島に滞在のち『仏領西印度諸島の二年』(1896) を刊行。

明治二三年四月「ハーバース・マンズリー」誌特派員として来日。八月松江中学に赴任。これが彼の運命を決定した。生徒の作文、近郊訪問、伝説口碑、骨董、浮世絵の蒐集研究により日本を知ろうとした。まだ古い日本の面影を残していた松江に住んだことがハインの日本観に特徴をあたえた。すなわち伝統的な日本文化を解明して、日本と日本人を理解する道を西洋人にひらくことになり、一方日本人に自省させる批評ともなった。

一月旧藩士の娘小泉セツと結婚し旧武士屋敷に住み、日本理解を進める好伴侶を得た。

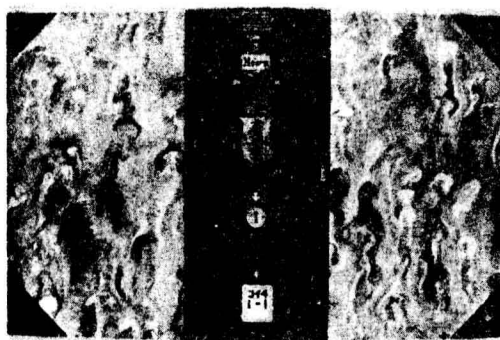
明治二四年一月寒さをさけて熊本第五高等学校に転任、松江時代の経験により創作にはげみ、アメリカ時代のボヘミアンの生活から学究と作家の道へ転じた。熊本の三年間に、九州各地のほか京都、奈良、中国路、隠岐などにも旅行。二七年四月琴平詣でのち十一月神戸「クロニクル」紙入社。熊本は風流心のない土地、神戸は西洋化した俗悪の街と映じた。同年『知られざる日本の影』(ポストン)、翌年『東方から』(ポストン、ニューヨーク) をアメリカで出版。ハインの日本紹介のはじまりであった。長男や妻の将来を考え、二九年二月帰化して小泉家を相続し、小泉八雲となった。

明治二九年八月上京、東京帝大文科大文学講師となり英文学を講じはじめる。市ヶ谷富久町円融寺通称瘤寺の隣の家に住み、好んで寺の墓地で瞑想しては講義、創作の想をねつた。この数年間に『影』『骨董』などの著述をつづけている。東大での講義はH・スペンサーの進化論哲学に裏づけられた社会文明批評をふまえるとともに作品の芸術的鑑賞を特徴とし東大の文学講義を大転換していた。三六年三月辞職、三七年四月東京専門学校に講師となったが、九月二六日狭心症のため急逝。雑司が谷に葬られた。

創作の経験による作品の批評鑑賞を中心にしてイギリス文学を講じ、作品のよみ方の根本を教えた点にその功績があった。浪漫的傾向のゆえに芸術至上主義、非倫理的と誤解されることもあった。一方欧米文学の新声をあわせ講じ、英文学研究に広い視野をあたえたとともにヨーロッパ文学に知識の乏しい日本の学生に世界文学への窓を開いた。上田敏は推賞

された弟子であり、その広汎な活動はハインに負うところが大きい。大学での講義は没後、学生のノートによって編集出版され、批評家ハインの名声を高めた。『文学鑑賞』『詩鑑賞』『人生と文学』『英文学史』その他。

ハインの日本研究はアストンらの学究的なものと異なり、日本人の風俗習慣、伝説、信仰など日常生活を通ずる直接体験から感得したものに基づいていて、文化人類学民俗学的な性格を帯びている。日本人の笑いに関する論文、また日本に上陸してからの日間、横浜、東京の街、建物、社寺、男女の生活を驚異の眼でながめ、同時にそのもつ意味、美的感覚などを探ろうとしているのはその好例である。ここに西洋人的優越感はない。これが日本研究に一貫する態度である。西洋人の標準で判断せず、異国趣味の好



小泉八雲全集

好奇心がないため、欧米人に日本の真実の姿を伝ええた功績は最大である。『心』(明二九)の深い日本人の心意の洞察を経て、『神国日本』(明三七)に社会、政治、宗教の面から日本論の総体を示した。

田部隆次は訳『小泉八雲全集』全一七巻、別巻一(大一一・昭三 第一書房。ほか)に学生版、家庭版など、平井呈一訳『小泉八雲全集』全一二巻(昭三九・四二 恒文社)。

〔怪談〕を『KWADAN』短編小説集。明治三七・四、ポストン、ニューヨーク、ホートン・ミフリン社刊。文学にたいする態度をうかがわせる代表的創作集。『古今著聞集』『玉すだれ』などの古典、民間説話から得て作り上げられた浪漫怪奇の世界である。平家滅亡にからまる哀話の『耳無し芳一』、『雪女をみた渡し守り』、『吉の運命』のほか『ろくろ首』『青柳物語』など一五編。またハインの自然ものへの愛情を示す虫のいろいろを綴る三編がふくまれている。

〔人生と文学』のち『Life and Literature』論文集。大正六・一、ニューヨーク、ドッド・ミード社刊。東大の講義を集めたもの。文学の社会的性格と機能を論じ文学理解を拡大した。文学と世論の関係、国際文化交流と各国民の相互理解とにおける文学の役割を論じた点は現在にも妥当する卓見である。読書論では情緒の表現として文学を規定し功利的見解を是正している。

〔知られざる日本の面影』のち『Glimpses of Unfamiliar Japan』随想

集。明治二七・九、ボストン、ニューヨーク、ホーン・ミフリン社刊。『私の極東第一日』ははじめてみる横浜、東京を印象主義風に描き筆力を示した。『狐』は民間信仰の対象である狐のありかたを稲荷信仰や狐伝説などを通じて探り、日本人の心情のありかたを求めている。『日本人の微笑』は外国人の不可解とする日本人の微笑、悲痛のときにも浮かべる笑いの、意味を心理的に解説し、日本人への深い理解を示している。

〔参考文献〕『小泉八雲記念号』（『帝國文学』明三七・一）市河三喜、北村恒夫『小泉八雲書誌』全二七巻（昭八一〇・研究社）田部隆次『小泉八雲』（昭三三第一書房刊）『小泉八雲全集』別巻所収 小泉一雄『父「八雲」を憶ふ』（昭六 養龍社）小泉一雄『父小泉八雲』（昭三五 小山書店）『近代文学研究叢書』第七巻（昭三三 昭和女子大学）『小泉八雲』（昭四四 講談社刊）『日本現代文学全集』五 外国人文学集（所収）（太田三郎）

小泉 龍（りゅう） 大正二・七・一三（1913）小説家。埼玉県川口市生れ。慶大高等部中退。満鉄上海事務所調査部を経て、敗戦まで上海特別市市政府につとめる。『桑園地帯』が昭和一八年後期芥川賞候補、文芸推薦賞候補となる。戦後三年『死霊の宿』でみとめられ作家生活に入った。その後『南支那海』『小説天皇裕仁』などで直木賞候補、『不安の旋律』で横光賞候補。丹羽文雄の『文学者』の重要メンバーの一人。短編集に『八月の砂』（昭三三・一 芸文書院）、長編に『失業の城』などがある。中国問題に関心が深く、日中交流協会員であ

る。

小磯良平（りょうへい） 明治三六・七・二五（1903）画家。神戸市に生れ、大正一一年、東京美術学校西洋画科に入学、藤島武二に学び、在校中の一三年に帝展特選となる。昭和二年、同校卒業。卒業制作（学校買上げ）は中学同級の詩人竹中郁をモデルとした『彼の休息』。三年から五年、竹中と同行欧州へ。一一年、官展を離れ、同志と新作派協会を創立。一七年、『娘の関を征く』で第一回芸術院賞を受け、二九年から四六年、東京芸術大教授を勤めた。

近代で清潔な色彩構図に特色があり、女性人物像の作が多い。堅実な写実的描写力を買われ、丹羽文雄『薔薇合戦』、林芙美子『波濤』、石坂洋次郎『暁の合唱』、石川達三『風樹』『人間の壁』、舟橋聖一『白い魔魚』、永井龍男『噴水』、川端康成『古都』など数多くの新聞雑誌の小説挿画を描いた。谷崎潤一郎『細雪』、『谷崎潤一郎作品集』などの装幀のほか、大衆雑誌の表紙や少年少女ものもてがけた。

小出正吾（ただよ） 明治三〇・一・五（1905）児童文学者、翻訳家。静岡県三島市の商家の長男として生れた。大正七年早大商学部を卒業し、しばらく貿易の仕事に従事していた。処女作『聖フラシスと小さき兄弟』（大一一・一〇 厚生閣）を書く。一三年帰郷、農耕にしたがいがながら、わが子を求めてさすらう老人への同情をえがいた『風琴爺さん』（昭元）、白い雀の幻想をめぐるユーマスな少年たちの物語『白い雀』（昭

五）、密航ロシア少年への船客や船乗りたちの同情を興味深いエピソードでつづった『赤道祭』（昭二二）などを創作しつづけた。これらの作品には、温和な人

がらとクリスチャンとしての理想主義を基調に人生の明るい面への志向や平和と愛の世界の追求があり、それが彼の全文学活動の主題となっている。昭和一三年『あま坊』によって第二回童話作家協会賞を受賞して童話作家としての地位をかけた。受賞作を含む短編集八編を『白い雀』にまとめ、一五年一二月に、金の星社から出版した。昭和三年に明治学院中学教諭となり、のち同学院の大学教諭となった彼は、外国文学の翻訳にも力をつくし、ニューベリー賞受賞作『ドブライ』（モニカ・シャノン作、昭一七 実業之日本社）や『南極へ行つた猫の話』（ルフ・キャロル、ラトロープ・キャロル作、昭一七 童話春秋社）など注目すべき訳業がある。幅広い教養と清潔で理想主義的人生観は、戦前、戦後を通じて不変であり、戦時中積極的に戦争協力をしなかったように、戦後も浮薄な民主主義謳歌をせず、『大きな虹』（昭二一 増進堂）や戦後の代表作『ぜったい』（昭二四）を含む短編集『風船虫』（昭二九・一二 金の星社）、唯一の長編『牛荘の町』（昭二二・八 増進堂）などで、生活のじみな描写を通して不易のヒューマンな生活信条を謙虚に伝えようとした。三七年A・A作家会議に出席、四一年から四五年まで日本児童文学者協会会長。フィクションのほか『ダビデのたて琴』（昭二三 光文社）などの聖書物語

やノンフィクション、絵本の仕事もある。（神宮輝夫）

小出 集（むね） 天保四・八・二八（1833）明治四一・四・一五（1906）歌人。

石見国（現・島根県）浜田藩士松田三郎兵衛を父として江戸に生れた。幼名新四郎。振興と号した。小出家の養子となる。歌は一六、一七歳のころからたしなみ江戸派の瀬戸久敬に学び、明治一〇年、高崎正風の知を得て、宮内省文学御用掛を拝命、のち御歌所主事となり、さらに奇人となった。著述としては紀行文『あさぎぬ』（明一五）、歌集『くちなしの花』三巻（明二七）、その続編二巻（明三三）、後編二巻（明三五）、拾遺二巻（明四一）を刊行。編輯社を結んでその機関誌『くちなしの露』（明三五）を創刊。門人の育成につとめた。没後の四二年七月『小出家集』上、中、下三巻（中川恭次郎編、歌学書院）が上刊された。『くちなしの花』四編には文や詩が入っていたが、それらを除き歌のみを集録したもの。その歌は語格、語法にならずまぬ弁放さがあり、御歌所派歌人中の異色であった。

「となりにはすゝはくおとをきゝながらくれしづかなる埋火のもと」世の人のゆるさむはどのなかならばもれむ浮名もさもあらばあれ（『家集』）（木俣 修）

小出 樞重（しげしげ） 明治二〇・一〇・一三（1887）画家。大阪市の生れ。明治四〇年東京美術学校日本画科に入学したが、のち西洋画科に転じて大正三年に卒業。はじめ院展洋画部に出品したが、広津和郎に勧めら

れて、八年二科展に『Nの家族』を出品して、橋牛賞を受け、さらに翌年出品した『少女於梅像』も二科賞を受けた。一〇年から翌年にかけて渡欧。一二年には二科会員になった。兵庫県芦屋に住み、鍋井克之らとともに大阪に信濃橋洋画研究所を設けて、後進を指導し、関西画壇のために尽くした。その作風はルネッサンスの画家に学んだレアリズムに、セザンヌ風の立体感のある近代感覚を生かしたところにある。風景、静物にもすぐれた手腕を見せたが、とくに裸婦の制作に新生面を開き、『横たわる裸女』(昭三)『支那寝台の裸女』(昭五)などの油絵の粘りある輝きを利用した量感のある描法は、他の追随することのできぬ画境を示した。彼の趣味には特異なものがあり、昭和初期にはガラス絵をしきりに制作し、ミニチュア画による油彩の効果を示し、一方、谷崎潤一郎の『夢喰ふ虫』などの新聞小説の挿絵にも独特の画風を見せた。また絵画にたいする感想や日常生活の随筆にも文才を示し、それらは『橋重筆』(昭二・一 中央美術社)『めでたき風景』(昭五・五 創元社)『大切な雰囲気』(昭一一・一 昭森社)などにまとめられている。

こうがさぶ

彼の絵を愛好した宇野浩二は、小出の風景画『枯木のある風景』を題材にして、同名の短編を『改造』の昭和八年一月号に発表して好評を博した。宇野は昭和二年以来精神異常に襲われて、再起をあやぶまれていたのだが、この一作で文壇に完全に復帰することができた。同時に、小出の天才と画業もこれによって、

いっそう一般に衆知されるにいたった。この風景画には妖気がただよって、不気味だが、やはり小出の感情移入のすぐれた画技によるためであると思われる。

(洪川 驥)

小糸源太郎 明治二〇・七・一三(1887)画家。東京府下谷区元黒門町に小糸源四郎の長男として生れた。生家は料亭「揚出し」。明治三九年、東京美術学校金工科に入学し、かたわら白馬会研究所で素描を学び、四三年、第四回文展に初入選。翌年、卒業後、さらに西洋画科に学んだ。大正三、四年、文展で褒状を受けたが、七年の文展に出品した絵が気に入らず撤回要求を強行したため、しばらく画壇を離れて修業に専念した。一五年、帝展に復帰し、昭和五、六年連続特選を受け、光風会会員となり、八年以後、帝展、文展、日展の審査員をしばしば勤めた。二九年、『春雪』により芸術院賞を受け、三四年、同院会員に挙げられ、四〇年、文化勲章を受けた。多摩美術大、金沢美術工芸大の教授を勤めたこともある。穏健な写実派の作家で、作品は日本的情趣に富み、官展系を代表する作家である。

きつすいの江戸っ子で、通人として知られ、随筆家としても著名で、随筆集に『冬の虹』のほか、『猿と話をする男』(昭二七・一二 筑摩書房)『風神雷神』(昭二九・一一 読売新聞社)がある。洪沢秀雄、久保田万太郎、市川猿之助(猿翁)と古くから交友があり、洪沢の勧めで俳句をはじめた。洪沢の随筆集『日照雨』の装幀もした。

また、学生のころ、帝劇創設に際し、和田英作の指導のもと、画学生の一人として舞台美術に携わったことがあり、大正七年、帝劇で上演の小山内薫のダマシツイオの翻訳劇『緑の朝』の舞台装置をしたのをはじめ、倉田百三『布施太子』入山『武者小路実篤』素戔鳴尊『わし』も知らないなどの装置をてがけた。

(石井 潤)

小糸のぶ 明治三八・九・二四(1905)小説家。静岡県生れ。静岡女子師範卒業後、小学校教員。昭和一六年内閣情報局の国民映画脚本募集に応じた『母子草』が一席入選し映画化されたのが縁で『モダン日本』などに小説を発表、『おもかげ』(「サロ」)昭二四・一一が直木賞候補作となる。『処女雪』(昭二八・三 文芸図書出版社)『若い樹』(昭三〇・一二 平凡出版)『純愛の砂』(昭三三・一二 講談社)などの若い男女の愛やモラルを中心に現代風俗を描いた多くの著がある。(笠井秋生)

黄 瀛 明治三九・一〇・四(1906)詩人。中国四川省重慶に生れる。青島日本中学校を経て日本に渡り、文化学院、陸軍士官学校を卒業。詩は一六歳ごろから書きはじめ、在日中は日本語で発表。『日本詩人』草野心平らの『銅鑼』などに参加した。詩集に『景星』(昭五・六 田中栄)『瑞枝』(昭九・五

ボン書店)がある。日中事変がおこる前後に帰国、南京參謀本部部員、軍政部特殊通信教導隊隊長などを歴任、国民政府軍將官に擢進したと伝えられるが、その後の消息は不明である。(木原孝二)

甲賀三郎 明治二六・一〇・五(1891)小説家。滋賀県日野町生れ。本名春田能為。生家は甲賀郡水口藩の藩士で井崎氏。大正七年東京帝大工学部在学中、寄寓さきの春田氏の養子となり、卒業して和歌山市の由良染料株式会社に技師として入社。九年農商務省臨時空素研究所に移り、一二年八月『真珠塔の秘密』を

「新趣味」に発表、そのさい郷土伝説上の勇者甲賀三郎兼家から採って筆名とした。『琥珀のバイブ』(「新青年」大一一・三・六)などの本格短編や、『気早の惣太の経験』(「苦楽」大一一・五・七)をはじめとするユーモラスなシリーズのほか、実話に取材した『支倉事件』(「読売新聞」昭二・一〇・一六)がある。昭和三年文筆専業となり、『幽霊犯人』(「東京朝日新聞」昭三・七・一一)をはじめ、新聞、娯楽、婦人雑誌で健筆を揮ったが、一般に通俗臭が濃かった。『焦げた聖書』(「新青年」昭六・八)『体温計殺人事件』(「新青年」昭八・三)『黄鳥の嘆き』(「新青年」昭一〇・八・九)『四次元の断面』(「新青年」昭一一・四)など本格的力量と心理的側面をついた力作で、一二年からは探偵戯曲の確立に志した。一七年日本文学報国公事務局長に就任、一九九年日本少国民文化協会事務局長に就任したが、九州出張の途次急性肺炎

に冒され岡山で急死した。本格探偵小説の理論的支持者で、一〇年以後芸術論者木々高太郎との論争はよく知られている。

『甲賀三郎全集』全一〇巻（昭和二一・二二 湊書店）がある。

『支倉喜伴』等、長編小説。『読売新聞』昭和二・一・一五・六・二六。昭和四・二、平凡社刊『現代大衆文学全集』第二巻に収録。大正時代の疑獄で有名な島倉儀平の事件にもついたもので、支倉は島倉を、神楽坂署長庄司は正力松太郎、能勢弁護士は布施辰治がモデルである。前科四犯の島倉は窃盗、放火、殺人の容疑で捕えられ死刑の判決が下ったが、冤罪を訴え、監房で縊死した。審理八年におよんだ事実を脚色しているが、被疑者のなみはずれた性格と言動が生彩を放っている。（中島河太郎）

郷倉千鶴 明治二五・三・三

昭和五〇・一〇・二五（昭和一九二五）画家。富山県生れ。本名与作。大正四年東京美術学校日本画科を卒業、翌五年渡米し滞在一年半におよぶ。九年第二回帝展に入選、翌一〇年再興院展に初入選のち、一三年日本美術院同人に推挙され現在にいたる。昭和一〇年多摩帝国美術学校（現・多摩美術大）創立に際し日本画科主任教授に迎えられ、現在理事でもある。三四年年度日本芸術院賞を受賞し、四七年日本芸術院会員となった。装幀に相馬御風の『御風歌集』『雪中佳日』などがある。（土屋悦郎）

香西照雄 大正六・一〇・三〇（一九一七）俳人。香川県生れ。昭和一

六年東大国文科卒業、大阪府立堺工業に奉職、一七年結婚、直後丸亀歩兵連隊に入隊、ラバウルに行く。二一年復員。二二年木田豊高、二七年高松一高、三一年成蹊高校に勤務、四〇年成蹊大学兼任講師。俳句は昭和九年従兄の手引きではじめ、一三年東大ホトトギス会で終生の師中村草田男に接し、二一年創刊の『万緑』に拠り、四〇年より編集担当、同人。第八回、現代俳句協会賞受賞。句集に『対話』（昭和三九・一二 星書房）『素志』（昭和四七・五 牧羊社）、著書に『人と作品・中村草田男』（昭和三八・九 南雲堂校報社）、そのほか編著、論文は多い。俳人其角や切字、李題に関する研究も深く、学生時代には高村光太郎や高藤茂吉に傾倒した。これらの素養が基盤となつて、俳句の伝統的特質を十全に生かす思想の結晶を目ざすという志向が形成された。的確な写生の力に基づいた、健康な明るい句が多い。

「あせるまじ冬木を切れば芯の紅」（井上京雄）

郷 静子 昭和四・四・二〇（一九一九）小説家。横浜市生れ。本名山口三千子。鶴見高女卒。戦時中勤労動員の経験があり、戦後は結核のため療養所を転々としながら日本文学学校に通い、野間宏の影響を受けた。横浜文学同人。昭和三二年結婚。四八年『れくいえむ』（『文学界』昭和四七・一二）昭和四八・二（『文学春秋』）で第六八回芥川賞受賞。自己の戦争体験を深く掘下げて、非常時の青春の哀歎と生命のはかなさをういういしい筆致で描いた。ほかに『文学界』掲

載の『成就』（昭和四八・三）『幽霊』（昭和四九・二）『罅いの外へ』（昭和四九・一）など。（橋詰静子）

高 史明 昭和七・一・一七（一九三二）小説家。下関市生れ。本籍朝鮮慶尚南道。本名金天三。江ノ浦高等小学校（現・江の浦中）二年中退。軍需工場に動員。一五歳より底辺労働者として職を転々とする。日本共産党に入党し活動するも朝鮮人のゆえに離党せらる。獄中で石川啄木詩集に感銘をうけ文学開眼。この苦悶と幻滅を『夜がときの歩みを暗くするとき』（昭和四六・九 筑摩書房）で思想化。作風は暗鬱で重々しい。評論集『彼方に光を求めて』（昭和四八）など。（立石 伯）

神代穂亮 明治一六・六・一四（昭和一〇・三・三〇）（昭和一九二五）書誌研究家。島根県津和野生れ。通称「丸ねすけ」。「たねあき」は柳田泉説。号帝葉山人、七松庵主人。島根県師範学校卒。はじめ県内の小学校に勤めたが、明治末年上京。独学で明治文学の研究（とくに書誌研究）に打ちこみ、文字に明るく「校正の神様」といわれた。石川巖と「書物往来」を出したほか、「校正往来」「銀座往来」などを発刊。『明治文化全集』全二四巻の編集発行に貢献した。（竹盛天雄）

上月乙彦 明治四三・五・一一（一九一〇）俳人、俳論家。姫路市生れ。本名は宗夫。昭和一〇年、早大西洋哲学科を卒業。明石市立教育研究所長、同天文科学館長などを歴任。俳句は野田別天楼に師事したが、その没後は、実作

から遠ざかり、俳論の筆をとることが多い。『芭蕉俳論の周辺』『俳句・この日本の一行詩』『明石と芭蕉』『芭蕉と切支丹』（昭和四七）『芭蕉俳論の諸相』（昭和四八・四 柿本人麿奉讃会）などの著書がある。（清輪敏郎）

高津春繁 明治四一・一・一九（昭和四八・五・四）（昭和一九三三）西洋古典学者。神戸生れ。神戸一中、六高、東大言語学卒業。昭和五〇年オックスフォード大学ペリーオル・カレッジに学び、ギリシア語とサンスクリットに比較言語学のデイブロマをうける。四三年まで東大教授、のち武蔵大学教授。昭和四〇年より日本西洋古典学会委員長。昭和二十一年『アルカディア方言の研究』により文学博士。文法と歴史との二部から成り、この方言の伝わった地域とミケネ文明との関係を解明、二九年六月岩波書店より刊行。著書は『比較言語学』（昭和一七・九 河出書房。昭和二五・一二 岩波書店）『古代ギリシア文学史』（昭和二七・七 岩波書店）『印欧語比較文法』（昭和二九）『ギリシアの詩』（昭和三一）『ギリシア語文法』（昭和三五）『古代文字の解説』（共著、昭和三九）『ホメーロスの英雄叙事詩』（昭和四一・一二 岩波書店）ほか。古典の訳業は、ホメーロス、アリストパネス、ルーキアノス、ギリシア悲劇をはじめ、多数にのぼる。（高橋 秀）

高祖 保 明治四三・五・四（昭和二〇・一・八）（昭和一九二五）詩人。岡山県で生れ、牛窓町で育つ。昭和一一年国学院高等師範部卒。少年のとき父金次

郎の死後分家した母に伴われて母の里滋賀県彦根町に移る。後年母姓の宮部に改める。昭和二年ごろ「惟の木」同人となり作品を発表。八年八月それまでの作品を集めて『希臘十字』（惟の木社）を刊行。第四次「惟の木」や「苑」の編集にも携わる。一六年七月には『露のある五分間写生』（月曜発行所）を、一七年五月には『雪』（文芸汎論社）を刊行。『雪』によって文芸汎論詩集賞を受賞。作品は静かな思考を知的に洗練された高踏的な語句によって表現する抒情詩である。さらに一九年七月、戦争詩集『夜のひきあげ』（青木書店）を刊行。この年応召、南方に渡りビルマ野戦病院で没す。死後、二二年一月に『高祖保詩集』（岩谷書店）が刊行された。

（佐藤房俊）

幸田 文 明治三七・九・一（1904）随筆家、小説家。父は明治の文豪幸田露伴、母は幾美子。その次女として東京向島の寺島村に生れる。姉歌子、弟成豊がいた。明治四三年数え年七歳のとき母を、四五年には姉を失い、弟も大正一五年に夭折した。その間東京麹町の女子学院に学びながら父露伴に家事や身のきびしい職をうけた。継母を迎え女子学院を卒業、昭和三年二四歳で三橋幾之助と結婚、翌年には長女玉の母となった。三橋家は東京新川の酒問屋だったが、幾之助は病弱で家産が傾いたのでみずから店に立ち小売りまでして三橋家の再興をはかった。しかし夫との性格の相違もあって一三年ついに離婚、長女玉とともに幸田家にもどった。幸田家は継

母が別居するありさまだだったので以後は父露伴のそばにあって幸田家を守り、晩年を迎え戦火の中に年老いた父の看護につとめながら長女玉の成長を見守った。二二年八〇歳を迎えた露伴を祝うために雑誌『芸林間歩』（編集野田宇太郎、発行東京出版）が『露伴先生記念号』を特集したとき、はじめて求められて父をめぐる生活を内容とした『雑記』を書いた。これが処女作である。同年七月三〇日露伴逝去、『芸林間歩』七八月合併号『露伴先生記念号』は天寿を全うした露伴追悼号の形となったが、同号に発表した『雑記』はたちまち幸田文の存在を



幸田 文

クロージアアップした。つづいて雑誌『文学』の『露伴追悼号』（昭二二・一〇）に露伴の『終焉』を書き、『中央公論』（昭二二・一一）に『葬送の記』を書いて新人として文壇にはなやかに迎えられた。その随筆のむだのないこまやかな感覚で織出された鮮明な文章は、露伴の身辺にあつてみずから身につけたものといつてよい。そのあと父露伴の思い出やみずからうけた頼など身辺に関する文章として『あとみよそわか』を雑誌『創元』の『幸田露伴特集号』（昭二三・一一）に、『渚の家』（のちに『菅野の記』と改

題）を『中央公論文芸特集』第二号（昭二五・一一）に発表したほか、その間同系列の随筆に『すがの』『かけら』『二百十日』『このよがくもん』『ずぼんぼ』『着物』『正月記』『おもひ出二つ』『呼啄』などがある。処女出版は以上のうちの『葬送の記』『菅野の記』を収めた四年二月中央公論社から出版した『父の死』である。つづいて『こんなこと』（昭二五・八 創元社）『みそつかす』（昭二六・四 岩波書店）などを出版したほか、露伴の未刊行文献として『露伴の書簡』（昭二六・五 弘文堂）『露伴小品』（昭二七・八 河出書房）『続露伴小品』（昭二八・六 河出書房）『露伴蝸牛庵歌文』（昭三〇・一〇 中央公論社）

『露伴蝸牛庵語彙』（昭三一・一二 新潮社）などを編纂して露伴研究に貢献するところが多かった。随筆からようやく小説の執筆にかかるようになったのは三〇年ごろからである。小説の出世作ともなつた長編『流れる』を雑誌『新潮』に発表したのは三〇年一月から二月にかけてであった。舞台を自分の生れ育った隅田川のほとりの花柳街にしているが、梨花という中年の芸者屋の女中を主人公とした客観小説である。新人としてはいくらかジャーナリズムに乗せられすぎた感みもあるが、この小説が新潮社から単行本（昭三一）になると待ち構えたように新潮社文学賞が与えられ、翌三二年には芸術院賞が与えられた。なおそのころの短編集としては『黒い裾』（昭三〇・七 中央公論社）があり、読売文学賞が与えられた。こうして作家としても文壇

的位置を得たが、戦後のジャーナリズムにスポイルされることもなく、つねにみずからを持してあせらず気取らず著実に自己の足跡を刻んでいった。その後のおもな作品集としては『ささなみの日記』（昭三一・四 中央公論社）『ちぎれ雲』（昭三一・六 新潮社）『包む』（昭三一・一二 文芸春秋新社）『笛』（昭三二・七 中央公論社）、つづいて自己の生長した向島と肉身を描いた注目すべき長編『おとうと』（昭三二・九 中央公論社）『猿のこしかけ』（昭三三・九 新潮社）『番茶菓子』（昭三三・四 創元社）『歌』『草の花』（昭三四・一〇 中央公論社）などがある。その人気は文壇に随筆家として名を出してからわずかに一〇年目の三三年から三四年にかけて早くも『幸田全集』が刊行されるほどであった。この作家がほかの女流と違っているのは、まず文豪露伴の娘ということであるが、文学者としてではなく、普通の人間として、女性としてきびしい露伴の愛の鞭に育まれた体験をすべて自己に消化し、晩年の父の謙虚な報告からきわめて自然にペンをとりはじめたことは最も異色的といえよう。露伴の病中は下駄屋か古本屋でもしようかという生活の心構えがそのままペンの先から文章となつてほとばしりはじめたのだといつてもよい。その文章は作家以前からすでに内容的に熟しきつていた。それが父露伴の逝去という事件に誘われて流瀉しはじめたのである。全集出版にいたるまでのジャーナリズムの流行時代が過ぎるといって

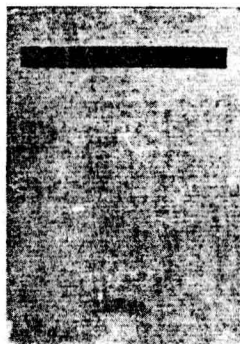
がつねである。だが、全集刊行後はむしろ文壇の外にあってしっかりと自己を持する態度を崩そうとせず、けっして無理な創作には手を出さない幸田文である。まだ流れも清らかだったころの隅田河岸でしっかりと身につけた江戸っ児らしい下町の清潔な感覚で、たえず新しい素材を求めつつ文学の道を歩いている。自己の庶民生活体験をそのまま自然に書く態度は明治の樋口一葉を思わせるが、一葉とはまた違った、もっと生活体験も豊かで根深い女流作家ということができよう。しかし幸田文が正しい評価をうけるのは、もっとのちの時代であろう。長編小説『闘』（婦人之友）昭四〇・一・一二。昭四八・六（新潮社）により女流文学賞を受けた。

『幸田文全集』全七巻（昭三三・三四中央公論社）がある。

（終焉）^{しりぞ} 随筆。「文学」昭和二二・一〇。昭和三一・六、新潮社刊『ちぎれ雲』に収録。父露伴を書いた随筆としては『雑記』につぐ第二作で露伴逝去後の第一作。八〇年の生涯をまさに終わろうとする父露伴を看病しながら、その死をしっかりとみつめた娘の、おのれを失わぬ眼がさわやかである。露伴はただ一人の娘にたいして最後まできびしかった。父娘の愛情がそのきびしさの中にしみじみとけあって、いよいよ露伴が死を自覚して、あとの覚悟はいかというとはいい、よろしうございます、と答える作者である。名画のような記録的随筆といつてよい。

『流れる』^{なが} 長編小説。「新潮」昭和

三〇・一・一二。昭和三一・二、新潮社刊。随筆から小説へ移った最初の長編。主人公は梨花という中年の女性で、隅田川のはとりの芸者屋の女中だが、教養もあり気性もしっかりしている。花柳界の生活の内側からの梨花の観察がこの作品の骨子である。小説として成功しているのは作者があくまでも従来の随筆に示した自己の文体を崩さなかったところにある。作者は梨花の生活を身につけるために、わざわざ花柳街の芸者屋にしばらく梨花と同じような生活をしたうえで書きあげたという。



流れる(箱)

（参考文献）堀谷賢『解説』（昭二九）角川文庫『幸田文随筆集』所収 武田泰淳、堀谷雄高、椎名麟三『創作合評』（群像）昭三一・一 高橋義孝『解説』（昭三一）新潮文庫『流れる』所収（野田宇太郎）

幸田成友^{しげとも} 明治六・三・九／昭和二九・五・一五（昭三〇／昭三〇）史学者、文学博士。旧幕臣幸田成延、妻猷との五男。東京神田山本町に生る。賢明な祖母と生母の訓育をうけ、いわゆる「偉い同胞」の一人たり（千島探検の郡司成忠、作家幸田成行、音楽家幸田延子、安藤幸子ら）。東京府立一中、一高を経て明治二六年帝国大学（当時東京のみ）に

入学、史学科を選んだ。学科と年級は違ったが寄宿舎で夏目漱石と同室したこともある。ランケの高弟リース（ルードヴィヒ）博士に私淑して実証史学の真髄をつかむ。二九年卒。こえて三四年抜擢されて大阪市史編纂長となり居を大阪に移し、四三年完成す。本文七冊付録一冊、わが国における西洋史学研究法による本格的市史の嚆矢である。市史完成後いちじ京都帝大文学部の講師となったが、帰京して、慶大、東京商大の教授となり、日本経済史、日欧通史、書誌学等を講ずるかたわら、文筆活動に精進す。

『幸田成友著作集』全七巻、別巻一（昭四六／四九 中央公論社）がある。

（吉田小五郎）

甲田鐘一路^{しげいちろう} 明治三七・九・五／（昭二九）俳人。千葉県鴨川市の生れ。旧姓粕谷、本名正一。日本大学中退。一八歳ごろより「俳諧雑誌」系統の初蟬に入会、大川丹沙郎らの指導をうく。大正一三年上京、久保田稻村の紹介により臼田亜浪に師事。石楠に入会。農商務省雇を経て東京市吏員となる。昭和三年亜浪の姪と結婚、甲田家を継ぐ。大野林火、太田鴻村とともに「山光」時代活躍。一七年友人の軍需工場に転ず。戦後米倉印刷を経て中央公論事業出版に入社。現在取締役。句集『家』（昭一六・三 交蘭社）『汗以前』（昭三〇・九 酩酊社）がある。

「このまま死なばなと鯛とんであたりけり」^{（松崎鉄之介）}

郷田 恵^{しげ} 明治三八・五・二五／昭和四一・七・一八（1905／1966）劇作

家。大阪生れ。本名前田徳太郎。大阪貿易語学校を中退後劇作に従い、舞台技巧にすぐれた大衆劇を関西歌舞伎をはじめ関西の商業劇団に数多く提供した。戦後も歌舞伎、新派、新国劇など大劇場向きの脚本創作、脚色、演出を幅広く手がけ、映画、放送劇の分野にも活躍した。『国民演劇』『現代劇』等に発表された戯曲に『天野屋利兵衛』（国民演劇）昭一七・一、『実川延若（段んやん）』（現代劇）昭三三・二）などがある。

（水平和雄）

幸田露伴^{ろへん} 慶応三・七・二三（一説に二六）、新暦八・二〇／昭和二二・七・三〇（1867／1957）。小説家、随筆家、考証家。本名成行、幼名鉄四郎。別号叫雲老人、蝸牛庵、雷音洞主、脱天子など。江戸下谷三枚橋横町俗称新屋敷に生れた。父成延は二七歳、母猷は二五歳、その第四子である。幸田家は代々幕府の表御坊主衆の家がらで、有職、故実、礼法、遊芸にくわしく、露伴の博識の源流のひとつはこの家風に求めることができる。父はもと奥御坊主衆今西家の出で、家つきの娘猷のところに人婿した。維新後は東京府知事大久保一翁のもとで下谷区長をつとめ、のち大蔵省の官吏にあげられるなど、実務の才に秀でていたが、一方宗教心に篤く風雅を解する人でもあった。母猷は音楽の趣味に富み、その才分も尋常ではなかったと伝えられる。露伴の同胞は男五人（三兄は夭折）、女二人である。長兄成常は実業界に入って相模紡績会社の社長となった。次兄成忠は郡司家を嗣ぎ、海軍大尉とな

って報効義会を結成、千島開拓の業績で知られる。次弟成友は東大史学科を卒業、東京商大教授をつとめ、日本経済史の権威であった。妹延子は音楽取調所に学び、ピアノの名手、安藤家に嫁した末妹幸子は音楽取調所の後身、東京音楽学校に学び、ヴァイオリンの名手、いずれも母校の教授として西洋音楽の移入と教育に貢献した。末弟の修造は東京音楽学校在学中病死している。

露伴は幼少のころきわめて病弱であったが、明治五年、六歳のとき下谷和泉橋通りの書家関雪江の姉千代について手習いをはじめ、翌六年御徒上町の会田塾に通って『孝経』の素読をうけた。このころ眼病を病んでほとんど盲目のまま数十日をすごしたこともある。八年、お茶の水の東京師範付属小学校に入学、数学に好成绩をおさめたという。小学校在学中、一歳ごろから馬琴の読本や種彦の草双紙を耽読、ついで『三国志』『水滸伝』などの中国小説におよんだ。一二年、一ツ橋の東京府第一中学校に入学したが翌年退学、ついで一四年、銀座三丁目の東京英学校（現・青山学院大学）に入学したが、これも中退、佐藤一斎の門弟菊池松軒の迎曦塾に毎夜通い、朱子学を学んだ。遅家麗水が同門であった。これよりさき、一三年ごろから湯島聖堂の東京図書館に通いつめ、経書、仏典から江戸時代の雑書にいたるまで、広く渉猟し、後年の博識の基礎をきずいた。この東京図書館で『燕石十種』を筆写していた淡島寒月と知合い、江戸文学への眼をひらかれた。一六年、一七歳のとき、父

にすめられて実業で身を立てることを決意、芝汐留にあった電信修技学校の給費生となった。翌年、同校を卒業、築地の中央電信局に勤務、一八年には十等技手として北海道後志国余市に赴任した。余市時代の露伴は、同地の禅寺水全寺の住職の好意で仏書を耽読するかわら、東海散士の『佳人之奇遇』や坪内逍遙の『小説神髓』『当世書生気質』などの新文学に触れ、とりわけ逍遙の影響によって文学革新の志を抱くにいたった。露伴が「身には疾あり、胸には愁あり、患因縁は逐へども去らず」（『突貫紀行』）という俯屈した心情を抱えたまま、職務を



幸田露伴

放棄し、北海道を離れるのは、二〇年八月二五日のことである。小樽から船で函館につき、旅費が乏しいため福島まで徒歩、それより汽車で東京に帰着したのが九月二九日、父の経営する紙店の店番となった。このころ植村正久に感化されてキリスト教に入信した父のすすめで聖書を読み、淡島寒月に教えられて西鶴の浮世草子に接した。一一年冬『露伴』を完成、依田学海の校閲を経て、金港堂の文学雑誌『都の花』にその掲載が決定した。この稿料をたずさえて大晦日に東京を離れ、信州、木曾、京阪をめぐる一

ヶ月の旅を試みた。この旅行中の経験が『風流伝』の素材として生かされることになる。二二年『新著百種』第五号として『風流伝』を刊行、忽然薄蕨を排して一大銀輪のヌツと出づるを望むが如く（内田魯庵『おもひ出す人々』）き衝撃を文壇に与え、露伴の声名はにわかに上がった。

明治二三年二月、読売新聞社の客員に迎えられ、翌二三年七月五日から紅葉の『伽羅枕』と同時に『読売新聞』に掲載された『ひげ男』は、わずか五回で中絶したもの小説における紅露時代の到来を読者に印象づけた。これよりさき、当時発表した『対偶體』『奇男児』『一利那』『貞美人』の四編を収める短編小説集『小葉集』（明二三・六 春陽堂）を刊行、とりわけ『対偶體』は、美と醜を煩悩から解脱にいたる仏教的主題のもとに包みこんで詩的情緒を横溢させた佳品であった。八月、『国民之友』に『一口剣』を発表、一月に国会新聞社に入社、以後、二八年まで代表作のほとんどが『国会』紙上に発表されることになった。年末、父母のもとを離れ、谷中天王寺町に一戸を構え、贅庭算村、森田思軒らいわゆる根岸派文士との交遊がはじまった。二四年は露伴の創作力がともとも旺盛に発揮された年で、最初の長編『いさなとり』のほか、『辻浄瑠璃』『寝耳鉄砲』『五重塔』などの佳作があいついで『国会』紙上にきざせ、ほかに異色の好色論『風流艶魔伝』（しがらみ草紙）

明二四・二）『宮尊徳翁』（明二四・一）○博文館刊『少年文学』第七編）など

も発表された。北村透谷は『辻浄瑠璃』『寝耳鉄砲』の二編を収める『新葉集』を評して、「理想詩人なる露伴が写真作者の領界に闖入」（『伽羅枕』及び『新葉集』）したことを指摘したが、露伴自身も『風流伝』以来の詩的な作風から転じてより客観的な小説的世界の構築を模索しはじめていたのである（翌明二五の露伴は根岸派の人びととの『風流』の遊びに熱を入れ、作品の量が少なくなっている）。二六年一月二八日から『国会』紙上に連載をはじめ二八年二月におよんだ長編『風流微塵』は、人生の諸相を全体的に描きあげようとする意欲的な試みであったが、仏教的な輪廻にヒントを得た「連環体」の小説形式の創出と無垢な少年少女のスケッチとに露伴の力量が証されているものの、百数十人におよぶ登場人物をさばききれず結局未完に終わった。露伴の長編作家としての資質の限界を示す作品である。

明治二八年三月、山室幾美子（幸田文の実母）と結婚、このころから将棋にこりはじめた。二月、『国会』廃刊にあたって告別の辞を書いた。二九年三月、森鷗外的主宰する「めざまし草」の合評欄「三人元語」に脱天子の名で鷗外、緑雨とともに新作小説の批評を載せ、樋口一葉の『たけくらべ』を推称したりした。七月には新進作家育成の意図のもとに、春陽堂から『新小説』を発刊するが、この「めざまし草」や『新小説』における批評家ないしは編集者としての活動は、創作の第一線から露伴が一步退いた印象を与えることになった。事実、三

十年代に入ってから露伴は、文筆活動の重点をようやく小説から評論、随筆、校訂、編著の方面に移しはじめる。釣魚や写真に熱中しはじめるのも三十年代の初頭からである。三〇年から三六年にかけて露伴が発表した作品は、『夜の雪』（『太陽』明三二・一）『太郎坊』（『新小説』明三三・七）『雁坂越』（『新小説』明三六・五）など、写実的な小品が多いが、このうち『雁坂越』は少年期の微妙な心理を牧歌的に描き出した露伴にしては珍しい言文一致小説の佳品である。一方、文語体の小説としては、西行法師を主人公にした神韻縹渺たる名品『二日物語』（『国会』明二五・五・一二・二七、五回で中絶、『文芸倶楽部』明三一・一二・三四・一）がある。

評論としては明治三二年一月から『新小説』に連載した『一国の首都』が代表的なもの、随筆集には荷風が愛読していたと伝えられる『調言』（明三四・九 春陽堂）『長語』（明三四・一〇 春陽堂）の二名著があり、校訂、編著には、『袖珍名著文庫第一編 芭蕉翁絵詞伝』（明三六・一 富山房）、『袖珍名著文庫第八編 山家集』（明三六・八 富山房）、『狂言全集 全三冊』（明三六・六・一〇 博文館）などがある。

露伴が『風流微塵蔵』の中絶らしい、八年ぶりの長編『天うつ浪』を『読売新聞』に掲載しはじめたのは、三六年九月二一日のことであった。この長編は『読売新聞』の予告に「露伴氏が今回の大作は文壇に於ける獅子の吼声に比すべきもの」（明三五・九・四）とあるように少な

なからぬ期待をもって迎えられたが、日露開戦とともに「脂粉の気」を憚っていた中絶され、三七年一月から連載が再開されたものの結局未完に終わった。この『天うつ浪』が中絶された間に、愛国的心情を托した長詩『出塵』（『読売新聞』明三七・三・一四・一二・三〇）所載『心のあと』序章）が発表されたが、文壇的反響に乏しく、これ以後露伴はようやく自然主義文学の旗頭を迎えようとする戦後の文壇から絶縁して、考証、史論の世界に孤絶した活動を展開することになった。史論の第一作は



五重塔

『頼朝』（明四一・九 東亜堂）である。編集事業の第一着手は、水谷不倒と協力して三九年から編纂をはじめた『新群書類従』（国書刊行会）であり、ついで四年に入って東亜堂から『日本文芸叢書』の刊行が開始された。明治四一年には京大の招きに応じて文科大学の講師に就任したが、わずか一年で職を辞し、東京に帰った。四四年には文学博士の学位を授けられ、ついで文芸調査委員会の委員に委嘱された。

大正期に入ってから露伴の著作には、『努力論』（大元・七 東亜堂）『修省論』（大三・四 東亜堂）などの修養

書、『運命』を最高峰とする『平将門』（改造）大九・四）『仙人の話』（現代）大一一・一五）のち『仙人呂洞賓』と改題、『蒲生氏郷』（改造）大一一・九）などの史伝類があるが、もっとも長期にわたって精魂を傾けたのは、大正九年に着手されてその死の年に完成した『芭蕉七部集』の評釈であった。露伴は昭和二年に還暦を迎え、四年には岩波書店から全集が刊行されたが、このころからその広範囲にわたる著作活動もようやく下降線をたどることになる。しかし、昭和十二年、七十一歳のとき、第一回文化勲章を授与されたのちの数年間に、露伴の文業は最後の光茫を放つ。小説集『幻談』（昭一六・八 日本評論社）に収められた『連環記』をふくむ四編の小説である。その死はこの『幻談』を刊行してから六年目にあたる三二年七月三〇日におとされた。享年八十一歳である。

露伴は近代的な学校教育の枠をはみだしたもともと偉大な独学者のひとりであった。その青年期の教養は、菊池塾や東京図書館で得た儒学や仏典、江戸文学などの知識に加えて、父のキリスト教信仰の影響のもとに培われたが、その核心をなすものは『西国立志篇』の流れをくむ自主独立の精神であったとおもわれる。彼の初期作品の中で重要な位置を占める一連の芸道小説は、この男性的な精神をやや古風な工匠気質に托して造型したものであるが、一方、それは近代化がもたらした卑俗な功利主義に向けられた痛烈な批判を内在させてもいた。芸道小説におけるこうした二重性は、露伴自身の内

なる「魔」が恋愛と芸術を至上の価値とする「風流」の精神に醇化されたときに克服され、現実と非現実のあいだに縹渺たる詩的世界がつくりだされる。『風流伝』であり、『五重塔』である。同じく西鶴を模倣することによって文学者としての途を歩みはじめたことから露伴は紅葉と並称されるが、紅葉が明治の風俗の再現にその才分を傾けたとすれば、露伴の主題は明治の精神を美的に昇華することにあった。しかし、その反面、近代的な自我意識と東洋的な悟達という相反する要素が、不熟に終わったときには、露伴の作品は生硬な観念の産物に墮してしまふ場合も少なくなく、また『風流微塵蔵』や『天うつ浪』が未完のまま放置されたことが端的に示しているように、多様な人生を写実的かつ総体的にとらえる長編形式も、彼の資質とはあいれないものだった。しかし、大正期に入ってから、『風流』の思想をこえるものとして、歴史の背後に「天命」の帰趨を洞察する史伝を書きはじめたとき、その該博な知識とあいまって、近代ではまれに見る幽秘で広大な文学空間が達成された。大正期では『運命』が、昭和期では『連環記』がその代表的な作品である。露伴は小説、史伝のほか、随筆、修養書、注釈、考証、校勘、翻訳など、広範な分野にわたって第一級の業績をのこしたが、近代文学史を小説中心に構成する常識に偏り、これら業績はかえりみられることがすくない。また彼の考証や随筆をたんなる雑学の所産として斥ける見方もかつてはあった。しかし、露伴にと

つては釣魚や将棋の趣味から、中国古典篇や仏典にいたるまでの膨大な知識の蓄積は、ことごとく相互連環する人間学の対象そのものだったわけであり、知識の細分化と体系化を目的とする近代西欧の学問とは異質な東洋の学芸の伝統を近代において再生させる前人未踏の試みだったのである。

『露伴全集』全二二巻（昭四一五 岩波書店）『露伴全集』全四〇巻、別巻一（昭二四一三三 岩波書店）がある。

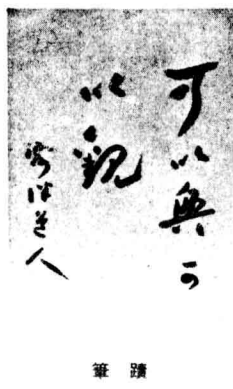
（露伴）^{（註）} 短編小説。「都の花」明治二二・二一八、九一二〇号。明治二

三・一二、金港堂刊。捕鯨事業で産をなしたニューヨークの大富豪ブensemは才色兼備の令嬢ルビナのために「常に愉快なる生活をなし得る者」を婿に迎えたという奇抜な広告を全世界に出して世間を驚かせるが、この企ての真意は、ルビナの恋人の説教師シンジアの操守を試すことにあった。有力な候補者の一人、中国南京の田亢龍に依頼されてその替え

玉となった日本人の食客吟鯛子は、ブensem家の管理人がきりだす無理難題に堪えて、みごと試験に合格するが、身代わり一件の発覚を恐れて中国に逃げ帰る。終始この奇妙な募集に応じなかったシンジアは、ルビナとの結婚を許され、吟鯛子はあらためてブensemの賓客となり、世界漫遊の旅に上る。この物語は中国明代の短編小説集『今古奇観』の『銭秀才錯占鳳凰傳』にヒントを得、ブensemは紀伊国屋文左衛門をもじつたものとされているが、プロットの大半は露伴の奔放な空想力の産物である。シン

ジアとルビナがキリスト教的な愛によって結ばれるところには、露伴が父成延からうけたユニテリアニズムの感化がうかがわれるが、一方、吟鯛子の淡泊で洒落な性格や各章の見出しに芭蕉の句が引用されている趣向に、「風流」思想の萌芽を見ることができる。

（風流）^{（註）} 短編小説。明治二二・九、吉岡書店刊『新著百種』第五号。彫刻師珠運は、奈良の仏像見学の帰途、木曾山中の須原宿で花漬売りの少女お辰と知合い、二人のあいだに恋が芽ばえるが、お辰は政府の高官岩沼子爵の隠し子であることが判って、むりに東京に連去



られてしまう。失意の珠運は宿の主人のすすめで、お辰のおもかげをうつした仏像を刻むうち、その裸像はにわかに生動して珠運に手をさしのべる。煩惱の「魔」を媒介にして「聖」を示現させたところに一編の主題があるが、透谷の有名なことば「恋愛は人生の秘術」をおもわせる恋愛至上主義と芸道の神秘への憧憬を夢幻的に融合させたこの超現実の世界には、明治の俗悪な実社会へのひそかな抗議がこめられている。

（いさなとり） 長編小説。「国会」明治二四・五・一九一―一・六。前編明治二

四・一一、後編明治二五・三、青木嵩山堂刊。伊豆下田在の農民彦右衛門が少年時代に故郷を出奔して、京都、広島、九州生月島、朝鮮、老岐など各地を遍歴し、さまざまの苦難をのりこえていくいきさつを描いた一種のピカレスク小説（悪漢小説）で、彦右衛門がわが子に旧悪を懺悔する説話形式がとられている。

京都で奉公していた染物屋の女房に不義をしかけられたり、生月島で娶った妻を姦夫ともども斬殺して老岐にのされるなど、「諸悪の根源」である女性に象徴される運命の重圧をたくましくはねのけていく捕鯨の名手彦右衛門の男性的な気魄と内なる「魔」に、露伴一流の人間観が託されているおもむきがある。露伴が東京図書館で閲覧したことのある古文獻『勇魚取絵詞』によって描きだされた勇壮な捕鯨の場面は、全編の圧巻である。

（五重塔）^{（註）} 中編小説。「国会」明治二四・一一・七―二五・三・一八。明治二五・一〇、青木嵩山堂刊『小説尾花集』に「血紅星」とともに収録。技術はすぐれているが世渡りにつたないために不遇を余儀なくされている大工のつそり十兵衛は、谷中感應寺の五重塔建立にあたって、住職朗四に強引に頼みこみ、親方筋にあたる川越の名工源太の仕事をお願いして、わが名を末代にのこそうと考える。江戸っ子の源太は十兵衛の理不尽な申し出に三度まで譲歩を重ね、自分の用意した設計図まで提供しようとするが、十兵衛はこれをかたくなにはねつける。

源太の弟子はさまざまな妨害を加えるが、十兵衛はこの受難にたえぬき、つい

に塔は完成する。落成式の前夜に襲った暴風のさなか、自分の技術を信ずる十兵衛は、強風にもめげず、塔の最上階に毅然として立ちつづける。十兵衛の造型には、「芸業ヲ勉修ス」ることによって自主独立の気風を鍛錬することを説いた『西国立志篇』の近代的精神が生かされているが、一方、仏教的な見地からする人間界への懲罰の意を寓した力動感あふれる暴風の場面には、「近代」に向けられたてきびしい批判が読みとれる。この矛盾を統一するものが古風な義理人情を重んずる源太と自我に執着する十兵衛とを和解させた朗四上人の役割なのである。

（一國の首都）^{（註）} 評論。「新小説」明治三三・一一―三四・三。明治三四・一〇、春陽堂刊、隨筆集『長語』に収録。江戸にくらべて東京が醜惡な都会に墮落したのは、首都にたいして愛情を欠いた薩長出身の政府高官の責任であるとした痛烈な批判を序論として、幼稚園の増設、道路、下水道の整備、公園の拡充など、近代的都市としての東京の未来図が縦横に論じられている。露伴の科学技術についての的確な知識、および文明批評家としての識見がうかがえるばかりでなく、明治時代におけるもつともすぐれた都市論のひとつである。

（天うつ浪）^{（註）} 長編小説。「読光新聞」明治三六・九・二―三七・二・一〇、一〇〇回で中絶。のち明治三七・一・二六―三八・五・三一にかけて同紙に続稿が連載されたが、ふたたび中絶、未完におわる。単行本第一明治三九・

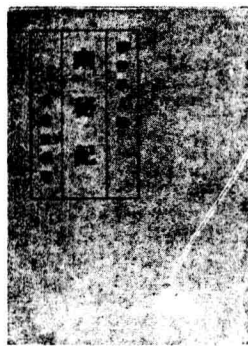
一、第二明治三九・六、第三明治四〇・一、春陽堂刊。宇都宮二荒神社の神前で出世祈願をした七人の青年は、七年後、六人までが志をとげたが、天地間にたれ一編の詩をとどめたいという理想を抱く水野静十郎だけは、小学教員の職にあまゐっている。水野は同僚の女教師岩崎五十子に思いを寄せるが、五十子は水野を近づけようとしていない。たまたま腸チフスで重態に陥った五十子の平癒を祈るため、水野は浅草寺に日参する。この水野の叶わぬ恋に併行して、水野にひそかな好意を寄せるお龍、お龍をあやつって相場師で水野の親友島木に親しませようとするお形など、異色の人物が紹介されるが、プロットが充分展開されないまま物語は中絶している。露伴の腹案はお龍のために殺人の罪を犯した水野が日本を脱出し、無人島でロビンソン・クルーソーもどきの生活を送るところに文明社会への批判を托するつもりだったという。

『西国立志篇』ふうの精神に生きる青年群像を描くことによって、明治社会総体をとらえようとしたこの作品は、露伴の写実的傾向の極限を示すものであり、このころ流行したニッチェ主義への言及もあるが、正宗白鳥が評したように「旧文学最後の長篇」の感は否めない。

『運命』説史伝。「改造」大正八・四、創刊号。のち『幽情記』とともに、大正一四・九、改造社刊『幽秘記』に収録。明の太祖の死後、孫の建文帝が即位するが、建文帝の叔父にあたる燕王は帝位継承の正統性を主張して挙兵、都南京を陥れて永楽帝となった。しかし、その後、

永楽帝はアルタイ族の征討に身心をすりへらし、榆木川で病死してしまいが、帝位をうばわれた建文帝は、「山青く雲白き処」を悠々と漂泊し、九〇歳の長寿を完うする。豪邁な永楽帝と善柔の建文帝、燕王に帝位簒奪を進言する怪僧道衍の智謀と建文帝に殉じた方孝孺の誠忠というように戯曲的なコントラストの妙味があるうえに、両帝の対照的な生涯には人事をこえた天命の帰趨が的確に表現され、露伴の史伝の最高傑作とされる。

『連環記』説中編小説。「日本評論」昭和一五・六。「幻談」「雪たたき」「鷲



幽秘記(箱)

鳥」とあわせて、昭和一六・八、日本評論社刊、小説集『幻談』に収録。『池亭記』の作者として知られる慶滋保胤が発心して僧寂心となったことに筆を起し、ついで愛する女の死に世の無常を悟った大江定基が、保胤の寂心と師弟の縁をむすんで寂照と名乗るいきさつを説き、さらに寂心の没後、単身入宋した寂照がふたたび日本に帰ることなく彼の地で生涯を閉じるところで物語が終わる。この二人に縁あって結ばれた人びと、菅原文時、大江匡衡、赤染衛門、増賀聖、丁謂などがあたかも環が連なるようにつきつぎに紹介され、この「連環図」をか

りて歴史の遠近法と人生の明暗がおもむろにくりひろげられる構成の妙は比類がない。

〔参考文献〕木下太郎『幸田露伴論』(昭九改造社刊『日本文学講座』12所収) 斎藤茂吉ほか『露伴研究』(『文学』昭二三・六) 柳田泉『幸田露伴』(昭一七 中央公論社。改訂増補版昭三二 真善美社) 小宮豊隆ほか『露伴先生記念号』(『芸林開歩』昭三二・七 八合併号) 中野重治ほか『露伴追悼号』(『文学』昭三二・一〇) 塩谷費『露伴翁家語』(昭三三朝日新聞社) 高木卓『人間露伴』(昭三三 丹頂書房) 斎藤茂吉『幸田露伴』(昭二四 洗心書林) 塩谷費『露伴の魂 その文獻的研究』(昭二四 角川書店) 小林勇『蝸牛庵訪問記』(『露伴先生の晩年』(昭三一 岩波書店) 塩谷費『幸田露伴』上、中、下(昭四〇/四三 中央公論社) 猪野謙二『露伴・もうひとつの『近代』』(『文学』昭四五・一〇) 瀬里広明『文明批評家としての露伴』(昭四六 未来社) 山本健吉『漱石 啄木 露伴』(昭四七 文芸春秋) 福本和夫『日本ルネサンス史論から見た露伴』(昭四七 法政大学出版局) 川村二郎ほか『明治のロマンス』紅葉・露伴・鏡花』(『国文学』昭四九・三) (前田 愛) 高知 聡『昭和九・九・二〇』(1934) 評論家。茨城県那珂郡生れ。茨城県立水戸一高中退。安保闘争前後より発言をはじめ。文学に関する批評や論考より、政治、思想のそれが現在活発である。批評の方法は、作家、作品、読者の三つの環のうち、作品と読者を重視し、読者による文学空間の造出を宗とする。批評的達成は低く今後に俟つところ多い。著書に『異貌の構図』(昭四三・

九 永田書房)『都市と蜂起』(昭四四)、共著『高橋和巳をどうとらえるか』(昭四七)など。(立石 伯)

幸堂得知『天保一四・一・?』大正二・三・二二(1863/1913) 小説家、劇作家、劇評家。江戸下谷生れ。本名鈴木利平、幼名庄吉のち平兵衛と称す。別号劇神仙、東掃坊。東叡山寛永寺御用達の商人であった父弥平には高橋夢叟と称し『上野公園治革誌』の著作がある。祖母、父の影響で幼少から芝居を愛好し京伝三馬に親しみ、俳諧、一中節、小唄にも秀で、いちじ不忍池弁天堂の老鼠堂水機基角堂に住んでいた。明治二年、三井両替店(現・三井銀行)の店員となり、仕事ぶりを見こまれて大番頭鈴木利平の養子となり、九年養父死亡とともに襲名する。三井両替店改組にともない三井銀行員となり、京都、青森の支店長を歴任、二四年四六歳で退職。東京下谷でしばらく呉服商を営むが失敗、以後文筆でたつ。銀行員時代からしばしば『読売新聞』などに劇評や戯文を寄せていたが、『東京朝日新聞』が発刊されると、幸堂得知の筆名で滑稽読物を連載しはじめ、二四年一月正式に入社、小説担当となる。いわゆる江戸趣味の一人で贅庭簞村らの根岸派の文人として知られ、その作品は滑稽洒落の戯文調のものが多く。初期の作品に『大当り素人芝居』(『新小説』明三二・七八)などあり、『天製米瓜の水』(『都の花』明二四・一一)、『大通世界』全三巻(明二四・五/一二 春陽堂)『浦島次郎蓬萊嘶』(明二四・一二 春陽堂)『幸堂滑稽